

## ゆきつく先は…

新潟県・新潟県立長岡高等学校 1年 川上 あずみ

「未来を見る目を失い、現実には先んずるすべを忘れた人間。そのゆきつく先は、自然の破壊だ。」これは、フランスの神学者アルベルト・シュバイツァーが残した言葉だ。私はこの夏、この言葉と出会い、大きな衝撃を受けた。そしてこの言葉の持つ意味を考えさせられることとなった。

私達の住む地球ができたのは、今から約46億年前。青い海に緑の大地、そこに生命は誕生し、長い年月をかけて進化を遂げてきた。しかし、そうして誕生した人間の手によって、原点である地球が壊されてきた。二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスにより、地球温暖化が進行しているのである。私達が生活していく中で、この地球温暖化の問題は目に見えにくい。気温の上昇は肌で感じることができるが、地球が壊れていく音を日々の生活の中で聞くことができないからだと思う。「このままじゃ家が壊れるかもしれない」と言われた時と「地球が壊れるかもしれない」と言われた時、どちらに危機感を覚えるだろうか。私はきっと家だと答える。形が見えて、何よりも自分が困るからだ。では地球はどうだろうか。もちろんそんなことがあっては困るだろうが、形を見ているわけでもなく「今は大丈夫だろう」という気持ちに負ける自分がある。そして、こうした気持ちが巡り巡ってきたツケが今の現実だとも言える。地球温暖化がそんな盲点になる問題だからこそ、私達は今、動かなくてはいけない。

ではこの問題をどう考え、個人・社会全体でどう動いていけば良いのだろうか。

「未来を見る目」「現実の先にあるもの」その言葉に詰まった意味を私は考えた。「今の利益や欲のために未来を壊しているのか」「未来のためにできることは何か」。アルベルト・シュバイツァーは現代の私達にそう問いかけている気がしてならない。私は、人間は経済の発展の中で、限りある資源の節約とのバランスを取らなくてはならないと考える。

私の住む地域では県全体を挙げて「環境にやさしい生活」を実現するための

活動を行っている。レジ袋を使用しないようにする取り組みや、白熱電球からLEDなどの省エネ型照明への転換を呼びかけるなど身近にできる活動から、二酸化炭素の排出削減に積極的に取り組む事業所が社会から評価される仕組み作りといった、企業での取り組みまで幅広くある。私も最近ではレジ袋をあまり使わず、マイバッグを持ち歩くようになった。また、政府による事業としてはエコポイントの導入が目にとまる。これは買うという行為からエコを考えるととても前向きで良いものだと思う。新聞でもそういった取り組みの紹介をよく目にするが、それを見ることで、環境問題について考える機会を得ることができ、とても良い連鎖になっていると考える。

しかし、もう一つ考えたいことは、当たり前と思っていることがどこまで必要かということだ。今年3月に起こった東日本大震災で電力不足による節電が呼びかけられている。そこで感じるのは今までいかに無駄が多かったかである。夜でも街は明るく、お店では必要以上に商品を照らす電気。そこまで必要だったのか。節電の夏と言われて初めて気付いた無駄の多さに驚いた。

これからは、社会全体が地球の今後について考えることができる場が必要とされると思う。その意識を高めるために、経済活動の一環としてエコをさらに推進してはどうだろうか。例えば、エコ商品を考える企業、作る会社へ政府から表彰があるのも良いだろう。フードマイレージを減らす地産地消だって立派なエコである。また、政府がさらに節電への呼びかけをするのも良いと思う。経済活動と節電は相反することのように思われるが、地球あつての経済活動である。経済を活発にさせながらも地球にやさしいお金の使い方をみんなで考えていきたい。

結局私達に、今すぐ地球温暖化の問題を解決するなんて大きなことはできない。しかしその問題を問題だと認識して、意識の改善をすることはできる。そして大量生産・大量消費という経済の形を、循環型・持続型に変えるということを提案したい。もちろんこのことによる経済活動の停滞は避けたい。しかし経済の明日を考えるこの時、地球の明日も共に考えてほしいものである。経済活動の一環である「働く」というところでエコを考え、作りだし、「消費する」というところにエコを見る。そんな社会が私の理想だ。

「未来を見る目を失い、現実に先んずるすべを忘れた人間。そのゆきつく先は、自然の破壊だ。」私達の行きつく先には何があるのだろうか。大人になった時の

私達、そして未来でバトンを受け継ぐ子供達が、今の経済活動を後悔するような地球であってほしくない。今から未来を見据えて行動すればそれも避けられるはずだと思う。未来の地球のために、今の経済を考えていこう。そして、私はアルベルト・シュバイツァーの問いかけにこう答えるだろう。「澄んだ瞳で未来を見て、社会経済の方向性を築くことだ」と。

<参考文献>

・レイチェル・カーソン(青樹築一訳)『沈黙の春』新潮社、1974年

・新潟県「地球温暖化防止活動の推進」2011年4月1日

URL <http://www.pref.niigata.lg.jp/kankyokikaku/1239566486833.html>

